かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314

町田の静かな住宅街に佇む東悠分教会
世田谷区桜新町から移転して約10年になる。
(11月17日撮影)

立教179年
12月号

海外伝道講習会 開催

11月月次祭

海外部

海外部（上原志郎部長）は11月21日、横山一郎先生（八木大教会前会長）を講師に迎え、大教会11月月次祭後に「海外伝道講習会」を開催。役員・部内教会長・よふぼく・信者ら多数が受講した。

横山先生は、有名な崔宰漢先生のお話しを台にして、元南星分教会が代替わりするたびに起こる海外布教ならではの問題点を指摘されながら、その中でも、変ってはならない、信仰心の置き所をお諭しくだされた。講話要旨は次の通り。

お話しくださる横山先生

◎「海外布教」と言うが、この道は、最初から「世界たすけ」の道だ

『教典』第一章に、

「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい。」

とは、親神天理王命が、教祖中山みきの口を通して仰せになった最初の言葉である。

今日は「海外伝道の講習会」ということだが、日本は四方を海に囲まれているので「海外布教」というが、親神様は最初から「世界たすけ」と仰った。

大和の一寒村、20数戸の庄屋敷村、鎖国中の日本で、外国の情報は何も入らない当時に、庄屋敷の人間を助けるとか、日本を助けるとか仰らず、「世界たすけ」を仰せになった。

これは我々、道の者にとっては、心にいつも置いておかなければならない事だ。

そうしたことで、先人達は国内に留まらず、世界に目を向けて布教された歴史があり、

このみちハどふゆう事にをもうかな
このよをさめるしんぢつのみち　（六・4）

お道は「この世を治める真実の道」だと仰る。

色々な宗教の教えを学ぶと、（いつの事になるか分からないが、非常に遠い道程が掛かるとは思うが）なるほどこの道の教えでしか世の中・この世界は平和にはならないということは、誰でも分かると思う。

天理教から分派した、いわゆる異端の宗教が7・8つあるが、それは教理が良いから、お道の教えが素晴らしいからだ。

◎世界宗教は苦難の歴史

教祖100年祭の前後6年間、私は、海外部ヨーロッパ課長をつとめ、ヨーロッパは随分廻った。ヨーロッパは、大体、キリスト圏で、キリスト教には2千年の歴史がある。

ローマには、バチカン・カトリックの本山、サン・ピエトロ大寺院がある。ここで、サン・ピエトロが政府の圧迫を受け、殉教した。その場所にこの寺院が建てられている。

カタコンベという地下のお墓があり、全長5百km程あるそのお墓の、一番大きなサン・カリストのカタコンベに行った。狭い通路の横に、死者を葬る穴が開いていて、その先の広場で集会等をして暮らしていた。

弾圧が非常に厳しく、キリスト教は、3百年間、迫害の中を生き抜いて、4世紀の初めに、初めてローマで認可された。キリスト自身が十字架で磔（はりつけ）になっているし、信者が3百年に亘って迫害され、地下に潜（もぐ）ってまで信仰を続けた。そういう歴史がある。

私は、それを見たときに戦慄を覚えた。やはりキリスト教は凄い。何十万という人が、苦労して教えを守ったということに身震いを感じた。

そう思うと、お道がキリスト教を凌駕して世界宗教になるには、もっともっと苦難の道を通らねばならないと感じた。

現在、お道は誰にも迫害されないし、往還道に出ているが、この往還道で心を許していると、どんどんと教勢は落ちると思う。もっと、他宗を学び、どうしてキリスト教が大きくなったか、

大きくなるには何があるか、もっと学んで、しっかりとつとめることが大事だと思う。

◎海外布教の道明け

私は、40年間、韓国伝道に取り組んできた。

奈良県橿原市にある八木大教会から、大正時代に布教師2人を韓国に送り、その2人の生活援助には、祖母が非常に苦労したが、結局、10年程で挫折して引き上げた。昭和に入って、布教師1人を上海に送ったが、これも引き上げることになった。

結局、八木で韓国に道がついたのは戦後のことで、私が教会長を勤めた31年間で、韓国に40ヶ所の教会を設立した。

これは、祖父母が苦労して伏せ込んだことが、大正時代とかには現れなかったけれども、戦後になって芽生えてきた――伏せ込みということは、その時は上手くいかなくても、非常に大事なことだと思う。

◎崔宰漢による韓国布教の顛末

私が小4の時、終戦を迎えた。同級生に韓国の子がいて、戦争中は、何も悪いことをしていないのに、日本人がその子を虐めた。ところが、終戦と同時に韓国が日本から解放され、韓国の子がいっぺんに跳ね上がって、今までおとなしくしてた子がきいきなり暴れるような事が起こってきた。

大阪では、韓国人が徒党を組んで悪い事をいっぱいやった。その内の一人、やくざの親分が、崔宰漢という男だった。これほどの悪人はいない。とにかく怖い。三白眼に尖った耳、太い腕でぐっと人を掴む、誰でもびびり、降参して子分になるというような人だった。

ところが、その人がハンセン氏病に罹った。当時は非常に嫌われた病気だ。前科前歴数知れずの悪で、服役中の堺の刑務所から脱走したが、病気には勝てないので、在日の信者さん宅で療養していた。その家に匿われていると、八木の部内の女会長がたまたま訪れ、かしもの・かりものの理を説き、おさづけを取り次いで、一生懸命信仰したら絶対に治ると話した。

やはり、悪い人は立て変わると、今度は物凄く善にも強くなる。とにかく何でも中途半端がいけない。それで話を聞いておさづけを取り次いでもらうと少しずつ良くなる。

（おさづけというのは、これは理屈抜きで、世界中で通用すると思う。ヨーロッパでも韓国でもアメリカでも、随分、おさづけしたが、その後、追跡調査すると元気になっている。おさづけというのは本当にありがたいものだ。）

崔さんは、だんだんと良くなり、追われる身でありながら、修養科に入った。信仰したら親神様が助けてくださると自信を持った。修養科を終えてから、路傍講演――どこに行っても「天理王命様は世界一の神様だ」としゃべる。当時、私は天高生で、学校帰りに電車に乗ると、電車に入ってきて「皆様に一言申し上げます。私はライ病で療養せよという命令をもらった。天理教を信仰したら入らんでも良いという証明書をもらった。」と言った。八木のハッピを着ていたので、同級生に「お前とこの変なおっさん、何か言うとるで」と言われた。私は恥ずかしいから次の車両に逃げた。また入ってきて「一言申し上げます・・・」と言った。――神様を一途に信仰して、晩年にはハンセン氏病の痕跡は一つもないと証明していただいた。

そして、山陽道、岡山・広島・下関、博多とずっと布教して回り、昭和29年、博多で元博分教会設立のお許しを戴いた。

ところが、教会長になったことで、警察に密告があり、元々は脱獄犯だと、新聞記事にすっぱ抜かれた。

そこで、当時、大教会長だった父が、自首するか逃げるか二つに一つだと。当時の海外部長に相談すると、それは自首だと言われる。また当時の表統領・諸井慶五郎先生は凄い、言い切った、「私は刑務所に入ったことがあるが、入るところと違う。逃がせ！」と。度胸のある人は凄い。それで、密航船の中でドラム缶に身を潜めて母国、釜山に帰った。

その時に、彼は、「お前は、自国に帰って、この道を広めろ」という親神様の思召だと悟った。帰国してしまえば犯罪者ではないので、一生懸命布教した。やくざと喧嘩もするし、警官とも喧嘩する。帰国して10年余で信者さんが沢山でき、教会を建てた。博多でお許し戴いた教会の御目標さんは、崔さんの弟が韓国に持って帰っていて、信者も建物もできたので、博多から釜山に移転しようと思った。

ところが、お尋ね者で日本に入国で

きない。それで、韓国は夫妻別姓なので、夫人の名前でお運びに行くことにし、移転・改称・任命の出願をしてお運びの日を待った。26日が近づくと、本人は船に乗ってきて、海に飛び込んで、小豆島に上陸し、日本人に成りすまして大阪にやってきた。

夫人の名前で出願したが、どう考えても、自分が布教してできた教会を夫人に持たすわけにはいかない。どうしても、自分が真柱様から理のお許しを戴くのだと、命懸けで、密航の貨物船に乗り、小豆島の沖合で飛び込んで、上陸して帰ってきた。

その時、会長だった父が真柱様に事情を申し上げると、「えらい奴やなぁ。泳いできたか。よし、願書は後でええ。お運びしてやる。」と、真柱様と本人と父とで、元博から元南星への移転・改称のお許しを戴いた。（任命願は取り下げとなり）本人はそのまま会長になり、喜んで喜んで、また密航船に乗って韓国に帰った。

私は、そのころ初めて韓国に行き、高校時代に電車の中で会って以来、10年以上経って初めて会って話した。――とにかくおぢばの理。それから、教祖は全世界の教祖。大教会の初代が信仰されたから我々はこうやって助けられた、大教会は根本だ。――どんな者からも怖がられるその男が、父に対してはハハーっと奉って理を立て、私は「若先生」と呼んでくれ、10年間余り自分が苦労した話を、下手な大阪弁で、いっぱい聞かせてくれた。――グッとつかんでガっとして、「お前な、俺の言う事聴かんと命無いぞ。」と脅迫まがいで信仰させたそうだ。

八木で、酒乱の韓国人を預かっていた。いくらやめろと言っても飲む。飲んだら会長出てこいと言う。おぢばに帰ったら真柱様に会わせろと言う。もう大教会では手に負えない。韓国に行けと崔さんの教会に行かせた。すると、崔さん宅で同じ様に叫んだら「何を！殺すぞ！」とボコボコにどつかれ、いっぺんに酒乱が治った。――おたすけも色々だ。大教会でどうにもならない者が、崔さんに掛かったらいっぺんに治って、布教所長になった。

そういう話を、三白眼の怖い顔をした崔さんが、私の顔を見て、手振りを交えて色々話すから、私もだんだん怖くなった。とにかく迫力があり、役員も皆、ビリビリしている。

その後、私も会長になり、在任中に150回くらい韓国に行ったが、子供みたいな年齢の私を奉るので、「何や、あの若い日本人？」と思っている者でも、親分が頭を下げるから仕方がない、皆、奉った。私はそれで韓国で言いたい事が言えた。色んな話も取り次げたと思う。

ただ残念にも取り次げなかったのは、おつくしの話。当時、韓国から日本にお金を持ち出すことは、スパイ活動・諜報活動と同じ重罪だった。経済的にまだ悪く、朝鮮動乱が終わって、皆、貧しかったので、おつくしが言えなかった。

これが、今も尾を引いていると思うが、とにかく色々と御守護を頂いて教会が次々と出来た。

そんな崔さんが、ある時、お願いがあると言う。10歳の男の子がいるが、これを将来、会長にしてほしい。崔さんが没後は、一の子分・右腕の許（きょ）さんに、しばらく持たせて、子供が一人前になったら会長にしてくれと約束して、公証役場に行って証書も作った。

もう一つ、約束してほしいと言う。ハワイ伝道庁の三國先生と昵懇（じっこん）で、呼ばれてハワイでも路傍講演したが、日本語では通じなかったので、生まれ更わったら、高校はおぢばの学校で勉強し、アメリカの大学に行かせてほしい。約束してほしいと真剣に言う。先の事は分からないが、私も引き受けた。それほど未来を信じて、昭和58年に出直した。

『天理教年鑑』という事典に年表が出ていて、本部員の没年月は出ているが、一般のよふぼくは出ていない。ただ一人、昭和58年に、韓国教団崔宰漢出直しと載っている（あの、顔を見ただけでも怖かった悪い人が、教団の教頭というものにもなったので）。これは凄いことだと思う。

◎元南星2代目

崔さんの没後、許さんが2代会長になった。

崔さんの後は、この許さんが、今は、私の子分だ。20何年間、毎日、韓国からファックスが来る。毎月、おぢばがえりして、回廊拭きして、現在、82歳。外国人で初めて、本部詰員のお許しを戴いて、26日に神殿奉仕している。

前真柱様が、かんろだいづとめを終え車椅子に乗られて東回廊に出られたとき、奉仕当番をしている許さんが「真柱様」と挨拶すると、必ず握手された。

それだけ、その2代目に対しても思いを持ってくださっていた。

その許さんが会長になって教会を持った。韓国は、血縁関係・同族意識が物凄く強い。でも、血が繋がってない2代目が会長になったら、血族が教会から放り出した。

そして、ここを使ってくれという信者があって、大きな教会から小さいところに移った。自分は自分で信仰しているので、私はおぢばからお許しいただいている、人間的にも信仰的にもしっかりしている許さんを支持した。

すると、追い出した側の、血族の人たちが、許さんを支持したということで、私も憎まれ、昭和62年、刑事が来て出入国管理法違反で私は逮捕された。反対派（元々、私を奉っていた者）が、宗教ビザを持たずに観光ビザで入国し布教活動していると密告したのだろう。これが韓国のごついところ、韓国人は激しい。

ところが、向こうは、私が支持しないから段々と異端になり、甘露台を立てておつとめをしだした。元博の教会に戴いた御目標さんは向こうにある。

それでも、おぢばの理はこっちでやっているので、再度、元南星教会の移転・御目標再下付を願い出ると、このときにも、いろいろとあったが、「おぢばに向いている者を放っておかれん」と、真柱様の親心でお許しくださった。

◎元南星3代目以降

そして息子が大きくなったので、約束通り3代会長のお許しを戴いた。ところが、息子の代になると奉ってくれず、無理に思った3代目が逃げてしまった。それで、崔さんの娘が会長になった。娘は崔姓ではなく、その息子も娘の主人の姓。崔で続けられない。韓国にはそういう難しさもある。

韓国伝道庁はソウルのアパートの一室にあって、近所からの苦情でおつとめもできない。歴代庁長は、皆苦労された。伝道庁を建てようという話は以前からあったが、話がまとまらない。日本人は和を以て貴しとなす、一手一つだが、韓国人は個が強い。

相談しても埒が明かないので、3代目任命の時に、元南星の教会を本部に御供して伝道庁として使ってもらうことになり、韓国の色んな活動が、活発に出来るようになった。

その後、許さんは、会長を辞めてから布教して、また不思議な御守護を頂いて光民という教会を興した。神殿も建て、前真柱様も今の真柱様も特別に入り込まれた。反対勢力のある中を、崔宰漢の信仰を受け継いでぢば一条にやっていることが、真柱様は神様だから分かるのだと思う。

20何年間、毎日、ファックスがくる。これは真実だと思う。毎月おぢばがえりして、26日には神殿当番をしている。

◎「海外布教」を通して見えるもの

そうして色々と考えると、やはり「信は力なり」、信ずることは力だ。

生半可・中途半端では中々御守護は頂かれない。軸がぶれたらいけない。そういう気持ちを持つところに神様は御守護を下さると、体験を通して感じる。

私は、会長を終えて、今年の5月まで15年にわたって、よろず相談所理事長をつとめた。歴代理事長は表統領を務められた方だ。そういう教会本部としては非常に重要なポストを引き継ぎ、憩いの家創立50周年式典をつとめて退任した。

やはり「信は力なり」、信じただけ神様は御守護くださるという、これを私は韓国で学ばせていただいたと思う。

◎「世界たすけ」のために心すべきこと

おさしづに、

この道というは何がいかん、彼がいかんと言うは、道減らすようのものや。何も減ったのやない。多くの中不思議やなあ、不思議やなあと言うは、何処から見ても不思議が神である。（明37・4・3）

不思議が神だと。いわゆる不思議な御守護、これは私たちの一番頂きたいところだ。

そのためには、やはり親神様の思いは世界だすけ、この道は世界だすけだと、何千年先か何万年先か分からないが、この道で世の中が治まるんだと、そういう信仰をするのがいい。

天の理であればこそ、万国まで一寸付け掛けてある。万国一体世界一体いずれ開いてみせる。（明37・3・29）

と仰る。

他の世界宗教も素晴らしいが戦争の歴史だ。それを上回り、この世に陽気

ぐらしの世界を建設するというのは、お道でしかできない。何万年先の事かも分からないが、世界をたすけると言われた立教の思いを心に置いて、私たちは通らせていただきたい。

みなせかいからだんくときたるだいくにこにほいかけ　（十二下り3）

◎この道の信仰は、場所・年齢不問だ

崔宰漢という人は、私が韓国に行ってにおいをかけたのではない。日本にいたのだ。

100年祭の時に、ヨーロッパで初めてできた、ヨーロッパでただ一つの教会ボルドー教会の初代会長も、フランスでにおいがかかったのではなく、天理大学で柔道の勉強にきていた。日本の熱心な信者さんの娘さんが、いろんな世話をして結婚したのが始まり。

「海外布教」は、海外に出ていかなければ出来ないのではない。日本にいる外国人に親切にするなりして、真実を尽くして、そしてその方がこの天理教・お道は凄いなということで、自国に帰って布教したら、そこから始まる。

皆様方の周りにも外国人はいっぱいいる。教祖の思いを心に持ち、日本人特有のおもてなしの心で親切にする。そうすると、あんな悪の崔さんをおたすけに行った女会長さんのように――ただ親神様を信じて走ったなら、この道は絶対に御守護いただくという気持ちで一条につとめたなら――神様は正直、絶対に公平、天理は公平だ。

大教会長だから御守護をたくさんもらえる、信者だからあまりもらえない、そんなことは絶対にない。信仰というのは、神様と自分、神様から見たら一名一人、同じかわいい子供。尽くした理・運んだ理は必ず受け取ってくださる。

神様は心通り御守護くださるから、そういうことをお互いの心に置いて、年を取っても頑張って、与えられた御用をしっかりとつとめさせていただきたい。

皆様方も、大教会長さんを芯に更なる前進をしていただくようお願い申したい。

最後に・・・私は81歳、ひっくり返すと18歳。何が違うか。――道路を暴走するのが18歳、逆走するのが81歳。恋に溺れるのが18歳、風呂で溺れるのが81歳。心が脆いのが18歳、骨が脆いのが81歳。偏差値が気になるのが18歳、血糖値が気になるのが81歳。東京五輪に出たいと思うのが18歳、東京五輪まで生きていたいと思うのが81歳。嵐と言えば松本潤・櫻井翔を思い出すのが18歳、鞍馬天狗の嵐勘十郎を思い出すのが81歳。

《以上要約》

「笠岡おぢばがえり」実施

―初帰参者も多数参加―

11月23日

布教部

11月23日「笠岡おぢばがえり」が実施されました。教祖百三十年祭を目指しての三年千日年祭活動では、成人目標の実践とともに、別席者の増加を目指す上から、「別席ひのきしん団参」を実施してまいりました。そして迎えた教祖百三十年祭の本年は、年祭活動の継続と未だおぢばへ帰ったことのない、初帰参者をお連れするおぢばがえりを目指し、「全ての教会で初帰参者を御守護いただこう」と申し合わせて、活動を進めてまいりました。そうした中、迎えた当日。十二時三十分のおつとめに向けて、続々と帰参者が西礼拝場へ参集します。多くの教会が結界前まで進み、かんろ台を指差して初帰参者におぢばの説明をする姿が印象的でした。

笑顔で帰参

靴もきれいに揃えて笑顔の参拝

「笠岡おぢばがえり」に参拝

大教会長様を芯に、心一つにおつとめを勤めさせていただきました。おつとめ後、大教会長様よりご挨拶があり、その冒頭、今回のおぢばがえりは一人でも多くの初帰参者をお連れして帰ろうと申し合わせ、それぞれの教会が取り組んできた事に対して労いを述べられた。引き続いて初帰参の方にも分かりやすく、ぢば・おぢばがえりについて説明され、最後に今日の日に向けて蒔いた種は必ず芽生えをお見せいただくことができる、と次なる成人の塚を目指しての歩みを促されました。

（布教部長　田中隆之）

青年会創立100周年決起 笠岡分会総会 開催

12・4 青年会

青年会笠岡分会（上原明勇委員長）は、12月4日、「青年会創立100周年決起 天理教青年会笠岡分会総会」を大教会で開催、全ブロックからの青年会員を始め、家族・教会ぐるみなど、合わせて158人が参加した。

今回の総会は、立教181年に迎える青年会創立100周年に向けての決起と、笠岡分会の新委員会発足式との2つの意味合いを持つものとなった。

真剣につとめる青年会員

おつとめまなび

午前の部では、まずブロック毎の役割でおつとめまなびが行われ、陽気で勇んだおつとめが勤められた。その後の式典の部では、青年会長様告辞を上原繁道大教会理事が代読。スローガンである『親孝行、夫婦仲良く陽気ぐらし』についての重要性について触れられた。続いての大教会長様祝辞（代読）の中では、教祖140年祭に向けて青年会員層が果たす役割などについて述べられた。そして、上原明勇委員長より、笠岡としての100周年活動について説明があった。

また、会員を代表して海松ヶ岡分会の森本勇さんと、木津和分会の丸山隼人さんが感話を行い、その後、北川茂久笠岡分会委員が、100周年活動の決意表明を行った。

午後からは抽選会が行われ、和やかな中にもあらきとうりようの決起を誓い合った一日となった。

（青年会副委員長　上原繁次）

上原明勇委員長のお話し

「有志ひのきしん隊」実施　青年会

青年会笠岡分会では、毎月恒例の有志ひのきしん隊を、11月15日に府世原分教会で行った。昨年に続いて2度目。この日は、大教会青年会から6人と府世原分教会の3人で、教会前の道路脇に積もった落ち葉、切った竹等の除去を行った。昨年の作業の効果もあり、今回は広い範囲で作業を進める事ができた。

青年会では、今後もひのきしんの依頼と参加者を、随時募集している。

（青年会副委員長　上原繁次）

道路脇の整備ひのきしん

修養科生の声

修養科生活を振り返って

湯田原分教会　高木優充

修養科に志願したのは親の勧めであり、私自身あまり参加したいとは思っておらず、無難な修養科生活を送れればいいと思っていました。

修養科生活で友人達ができ、いろいろな身上を見せていただき、おさづけを取り継ぐ中で、最初は本当にただ取り次いでいただけでした。しかし、仲良くなるにつれておさづけに対する姿勢も変わってきて、本当に助かって欲しいと思う様になりました。そして次第に朝夕のおつとめでもお願いする様になりました。それからはひのきしんにたいする思いも変化してきて、他の方により親切になれる様になりました。

これから、自教会に戻って社会に出ても今の気持ちを忘れ無い様に頑張りたいと思いました。

修養科を終えて。

上小畠分教会　田中典子

この3ヶ月間ほんとにいろいろなことを、学ばさせてもらいました。

仲間と、協力しあうこと。何をしていいのかわからなくてとまどってましたが、いろいろ、指示をしてくださったりしました。

言われないと動けなくてほんとに嫌でした。

おてふりや、鳴物もほんとにはじめてでできるまで教えてくださいました。

仲間にも、支えてもらってすごくうれしかったです。おてふりの練習などをつきあってもらったりもしました。

私は、天理教はまだまだ始まったばかりなので、これからいろいろと勉強していきたいです。

修養科を終えて

福岩分教会　三阪ふく子

私は退職を機に修養科を志願させていただきました。

クラスには様々な身上や事情の方がおられ、残念ながら一緒に修了できなかった方もおられました。自分たちに何ができるだろうと考えたときに、自分の助かりより先に、人の助かりをお願いさせてもらおうと、お願いづとめやひのきしん、おさづけの取り次ぎあいをさせていただきました。3ヶ月の間で不思議で鮮やかなご守護を見せていただき、神様や教祖の存在を身近に感じ、改めておぢばの素晴らしさを感じました。

今後は教会の行事への参加、月次祭のおつとめ奉仕者としてつとめていきたいと思います。また、毎日神様のご守護に感謝し、ひのきしんやおたすけをさせていただきたいと思います。修養科で学んだことや、感じたことをまだ修了されていない方にも伝えていきたいと思っています。

修養科を終えて

稲倉分教会　永戸ゆみ

「修養科へ行きたい！」私のわがままの始まりでした。子供もおり周囲のたくさんの協力がなければ不可能な願いにもかかわらず、皆が快く手助けして下さいました。私が決意したのは義母の身上からでした。主人との縁が

きっかけで天理教を知り、義父の身上からおさづけをいただいたものの、深くは信仰しておりませんでしたが、母への恩返しをしたいとこの度志願させて頂きました。教えを学び、人々に大変恵まれ、深い親心を知る事ができました。お導き下さった先生方や同期の皆様にも子供達のお世話をして下さり、感謝の気持ちでいっぱいです。学ばせて頂いた事を生かせる様、これからもお道につながり、母の思いを私がしっかり受けとめ、子供達や未来へつなげる様な役割をしていきたいと思います。そして、尊敬する義父母へのご恩返しができる様、教えを心におさめてつとめてまいります。

3ヶ月を終えて

米美分教会　三代　いつみ

3ヶ月を終えて、まずは安心しました。

病気のため3週間入院し、出席日数やひのきしんの参加回数の関係で、修了は難しいかも知れないと言われていたからです。

しかし、色々な方々の助けがあり、おさづけを毎日取り次いで下さったおかげで発作もなく、無事修了することができました。

身上を見せていただいたからこそ修養科に参加できましたし、教理はもちろん、おてふりや鳴物、おさづけの取り次ぎの心構え、先生方からの有難いお話からもたくさんのことを学びました。

また、多くの方々との深く得難い繋がりも得ることができました。

修了できましたが、これで終わりでなく、得たものを忘れないように、これからもお道につながり続け、ようぼくとしてしっかり神様の御用をしていきたいです。

こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されていましたので転載いたします。（敬称略）

▼『天理時報』

▽12月4日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡㊬　藤井光子さん

めぐりあい咲き誇る苦難（つむ）のり越えて
赤き糸にて人生紡ぐ

・海松ヶ岡㊬　池田広子さん

日溜（ひだま）りの菜園に遊ぶ小雀（すずめ）が
虫食いだらけのキャベツをつつく

▼表紙写真　（東悠分教会　提供）

立教百七十九年　十一月月次祭　祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	谷内伸自
	中村道徳

講話	海外伝道講習会

賛者	赤木素志
	内海史郎
指図方	吉岡壽

春季大祭講話	大教会長様

役割／区分	坐り勤	前半	後半
地方	門脇元教	上原繁道	吉岡壽
	森本忠平	上原浩	今川昌彦
	高木昭祥	横山逸郎	淺野明教
おつとめてをどり	大教会長様	佐藤道孝	中村邦義
	上原明勇	岡﨑真一	中島誠治
	上原繁道	中村道徳	吉岡誠一郎
	大教会奥様	内海安子	谷内美知子
	田中ますみ	森本冨美子	横山小智榮
	門脇郁子	高木孝子	吉岡八恵
笛	杉原博之	森本忠善	上原繁次
ちゃんぽん	笹尾正治	山野弘実	田林久嗣
拍子木	中村剛	三島渉	内海史郎
太鼓	上原志郎	武内清明	虫明立生
すりがね	谷内伸自	山田敏教	渡邉隆夫
小鼓	中村義太郎	赤木素志	佐藤真孝
琴	虫明好美	佐藤香苗	岡﨑豊子
三味線	上原順子	武内正美	門脇加津
胡弓	今川佐智子	三島照美	室悦子

笠岡大教会 年間行事 予定表

部会／月	婦人会	青年会	少年会	学生会 学生担当委員会
1				
2	3　直轄委員部長並びに委員研修会	巡　回		
3			30~1　鼓笛合宿 1　笠岡団おつとめまなび総会	3~9　学修 大学の部 10~12　学修 高校卒業生コース 21　学生層育成者講習会
4	18~19　婦人会おぢばがえり 19　天理教婦人会第99回総会			おぢば管内 学生親睦会
5		28　ひのきしん団参	21　縦の伝道講習会 28　テッチャンと遊ぼう わかぎのつどい	
6	3・4　こかん様に続く会（大教会）	1~24　おやさとふしん 青年会ひのきしん隊入隊		
7	1・2　委員部長後継者講習会		26~4　こどもおぢばがえり	
8		16　あらきとうりょう入門塾 27~3　全分会布教推進週間	22~23　キャンプ	9~15　学修 高校の部
9				
10	2　ひまわり会のつどい	1　父親講座 27　第93回天理教青年会総会		
11	4・5　こかん様に続く会（おぢば）			
12				
備考	◎例会日（毎月３日） ◎直轄委員部長連絡会（21日） ◎ひまわり会（２日） ◎女子青年例会（随時） ◎大教会掃除ひのきしん（毎月19日）	◎あらきとうりょう一斉にをいがけデー（毎月第２日曜日） ◎有志ひのきしん隊（毎月）	◎教会おとまり会の実施 ◎テッチャンシアター（親子参拝） 1・5・7・8・10月の21日 祭典後	

◎よふぼく勉強会　毎月21日 午後1:15～2:00（1・2・4・6・7・8・10・12月）、おさづけの取次　毎月次祭直後

立教１８０年(平成29年/2017年)

部会 / 月	全体行事 その他	ひのきしん	布教部	海外部
1	4~18 直轄教会春季大祭参拝 20 年頭会議	25~27 春季大祭詰所受入		
2	2~15 部内巡教 19 教会長夫妻研修会① 28~3/1 修養科修了講習会	16~29 本部食堂(東ブロック)		
3	2~15 部内巡教 5 雅楽勉強会 19 教会長夫妻研修会②			英文パンフレット配布
4	23 ピーチの会 麺食いグランプリ	17~19 教祖ご誕生祭詰所受入	29 全教一斉ひのきしんデー	
5	4~18 直轄教会定期巡教	1~15 本部食堂(福山ブロック)		タンザニアおたすけ訪問
6	28・29 修養科修了講習会			
7	21 人材育成講習会 26~4 こどもおぢばがえり	1~23 直属ひのきしん特別隊(西ブロック) 16~31 本部食堂(島根ブロック) 26~5 こどもおぢばがえり詰所受入 前半：7/26昼～31昼 後半：7/31昼～8/5昼		
8	8/28～H30/3/24 **後継者講習会**	6~20 直属ひのきしん特別隊(上府ブロック)		7・8 英語講習会
9	**23 笠岡にをいがけ推進日** 28・29 修養科修了講習会		1~30 布教推進強調月間 21 布教推進講習会(祭典後) 28~30 全教一斉にをいがけデー	
10	4~18 直轄教会秋季大祭参拝 22 大教会長杯親睦スポーツ大会	1~15 本部食堂(高屋ブロック) 25~26 秋季大祭詰所受入		
11	**23 若人のつどい** **25・26 別席ひのきしん団参**			英文パンフレット配布 21 海外伝道講習会(月次祭に合わせて)
12	20 心定め提出 22 年末大掃除 28・29 修養科修了講習会	27 詰所餅搗		
備考	◎部長会議 毎月29日 午前10:00 ◎役員会議 毎月29日 午後 1:00 ◎役員並びに直轄教会長会議 毎月29日 午後 2:00 ◎直轄教会長の集い 毎月20日 午後 2:00 ●雅楽会練習 毎月次祭前日夕勤後 舞楽練習 随時	註：ブロックの区分けは 東：岡山県以東の直轄教会とその部内教会 西：広島県以西の直轄教会とその部内教会 上府：上下、府中市	◎おかえり講話 10月25日 未定（別席団参時）	◎月例勉強会(毎月21日) ◎『英文かさおか』発行 ◎海外よふぼく月報

◎部長会議・役員会議・役員並びに直轄教会長会議：２月は末日、4・7・9・12月は20日(直轄教会長の集いに替えて行なう)

十一月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に　会長上原理一　慎んで申し上げます
親神様には一列人間の陽気ぐらしを楽しみに日夜を分かたずご守護下さりお見守り下さるばかりでなく　時に応じ旬に応じて身上事情を通して心の因縁をお見せ下され　より一層陽気ぐらしへとお導き下さいますことは誠に有難い極みでございます私共は見せて頂く因縁の姿に戸惑いを覚えながらも自覚し　日々は親心に添いきって因縁納消出来るよう　御恩報じを念じてたすけ一条の上に努め励ませて頂いております
その中にも今日の吉日は　月に一度お許し下された御祭日でございますので　只今からおつとめ奉仕人一同　たすけ心を添えて明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて　十一月の月次祭を執り行わせて頂きます　旬の寒さを厭わず今日の日を楽しみに御前に寄り集いました道の子供たちが共にお歌を唱和し　日頃のご高恩に改めて御礼申し上げる状をご覧下さいまして　親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて本日は祭典に引き続き海外伝道講習会を開催させて頂きます　世界一列を救けたいとの親心を一人でも多くの人に届けたいとの思いが　国内に留まらず海外にまで達した現実をお聞かせ頂き　日頃のたすけ心の大切さを学ばせて頂きたいと存じます
又目前に迫りました二十三日の笠岡おぢば帰り目指し　初めておぢば帰りをする人を一人でも多く連れ帰れるよう精一杯努めさせて頂きます　教祖年祭の年の総仕上げに相応しい笑顔一杯のおぢば帰りになるようお連れ通りの程をお願い申し上げます
更には又　我さい良くば今さえ良くばの現代にあって　ようぼくの自覚を持ってたすけ一条に邁進することは並大抵な事ではございませんが　御恩報じの心によるたすけ一条の歩みこそが　これからの世界が救かる唯一の道である事をしっかり若者にも伝えて　共に御恩報じの道を歩んで行く所存でございます
何卒親神様には　世情に流されず真実の親を見つめてたすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして　万たすけの上に自由のご守護を賜り　親心に添う人が弥増して　人々が助け合う陽気づくめの世の状に　一日も早く立て替わりますようお導きの程を　一同と共に慎んでお願い申し上げます

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介　③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は一句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

大教会だより

◎第九〇五期修養科
自　立教179年9月1日
至　立教179年11月27日

＊教養掛
三ケ月間　田中隆之（大教会役員・福山分教会長）
一ケ月目　竹本和道（福芦分教会長）
二ケ月目　西村彦一（瑞雲分教会前会長）
三ケ月目　藤本芳久（東水島分教会長）

＊修了者
湯田原　高木優充
雲東　内田直弘
福岩　三阪ふく子
稲倉　永戸ゆみ
雲東　三代いづみ
上小畠　田中典子

◎教人資格講習会修了者（前期）
立教179年12月1日終講
稲倉　林岡君江

◎教人資格講習会修了者（前・中期）
立教179年12月6日終講
神村　前田多真栄

◎直属ひのきしん特別隊
自　立教179年12月1日
至　立教179年12月6日
惠陽　藤本道喜
自　立教179年12月7日
至　立教179年12月8日
川島郷　香取満彦
自　立教179年12月9日
至　立教179年12月11日
高屋　武内清明
自　立教179年12月12日
至　立教179年12月20日
稲倉　田中丈博

訃報

森本重吉氏
雅鶯会副楽長
12月5日出直されました。
享年　七十二才

よりみち

先日、とあるリサーチ番組で、某有名ホテル運営会社が特集されていた。徹底した「おもてなし」のサービスで、全国に数十カ所あるホテルリゾートは大盛況。日本の人気の宿トップ10のうち4施設がランクインし、海外進出も進めているという。

「おもてなし」という言葉は、流行語にもなったが定義は曖昧であり、親切心や優しい笑顔は、他の国にもある。この会社では、単に客の要望に迎合するのではなく、日本独自の価値観を示す事を目指してきたそうだ。そのために日本独自の価値を再発見し、その示し方を相手の側に立って徹底して考え、おもてなしを創造している。例えば、外国人向けの施設では、日本文化を味わってもらうために、あえて土足厳禁とし、エレベーターの中にも畳を敷いていたりする。地方の施設では、その地方の郷土料理・特産物・祭り・地元出身の従業員の方言などでおもてなしをしている。

私はこの放送を観ていて、お道の教えや教会について当てはまるところを感じた。それは、「世界平和」や「親孝行」などを目指す教えは他にもあり、そのうえ、宗教を必要としない世の中の風潮に、私たちは迎合したり遠慮していないだろうかという事。教祖130年祭の年が暮れようとしている今、しっかりとこの天理教の教えの素晴らしさ、だめの教えたる所以を再発見、再認識し、堂々とその教えや価値観を示す事が必要だと思う。そして、おたすけ相手の立場に立って徹底して考え、陽気ぐらしを創造していかなければならないと思う。例えば、家族の基盤すら危うい今日において、夫婦や教会家族が仲睦まじく暮らす姿だけでも、お道の良い雰囲気は伝わるであろうし、教会が友人・知人の憩いの場になれば、「たすけの道場」に近づいたと言えるかもしれない。

これからまた次への歩みが進む時、まずは「親孝行・夫婦仲良く陽気ぐらし」を日々実践していきたいと思う。

（上）

どういうような意味を持っているのか、ということを、まず考えてみるならば、詰所の持つ意味も、あるいはこれをどういう気持ちで運営していくかということも、はっきりするだろうと思うのであります。

おぢば帰りということは、私は、私達の信仰上、欠かすことのできない重要な位置を占める行為だと考えております。なぜならば、おぢばという所は、親のおわす所であるから、親を思うなら、当然、子として、慕わざるを得ない。親を慕うならば、やはり親を求めてかえって来るということが、おぢば帰りの私たちの意味である。こういう言葉で説明すると分かりやすいかと思いますので、表現いたしますならば、おぢばという所は、帰らなければならない場所ではない。むしろ帰らせてもらわずにはおれない所なんだ、こういうふうにお考えを頂きたい。それは、今申しましたように、親神様の深い思召を思案し、今は私たちの目で、じかにお姿を拝すことはできないけれども、教祖が御存命でおわすということを考えるだけで、おぢばという所は、恋しくなってくる所である。これは、みかぐらうたの中にも触れておってくださるのであります。

私は、親の思いをたずね、考えれば考えるほど、帰らせてもらわずにはおれない恋しいおぢばとなってくるに違いないと、このように考えているのであります。

そこで皆さん方は、今回もおぢばへかえって来られたのであります。おそらく、この度は、この建物の竣工ということを一つの目的として、この機に会わしてもらおうというのでかえって来たという方が多いでしょう。しかし、初めてかえって来た人もおられましょうけれども、今日の場合は、私は、むしろ、今までからも何度も何度もおぢばへ運んで来た人が多いと思い

ます。

そこで、皆さん方が、今まで何度も何度も度重ねておぢばへかえって来られたそのうちにも、改めて振り返ってごらんなさい、きっとその都度その都度、多少違った気持ちを持って、おぢばへかえって来たというようなことにはならないでしょうか。例えば時には、教会長はおぢばへ招集されたんだというので、私は教会長だから帰らなければならないんだというので、その招集に応えて、とにかく帰って来たというようなこともあったでしょう。あるいはまた、親神様から一人の病人を与えられて、何とか救かってもらいたい、それがためには、どうしてもおぢばへ帰らせてもらわずにはおれない、ということで、取るものも取りあえず慕うて帰って来たおぢば帰りの日もあったでしょうし、その都度その都度、考えてみたならば、心に何か非常に求め、親神様を慕い、親神様にすがりつきたい気持ちを持っておぢばで帰って来たおぢば帰り、あるいは、そのときは当然おぢばへ帰るのだというので、役目柄帰って来た等、振り返ってみたならば、その時その時、いろいろな気持ちを持っておぢばへ運んでおられるに違いないと、想像するのであります。しかし、私は、いずれもが、おぢばへ帰って来たというその事実を、親神様に御覧頂き、受け取って頂いたということにおいては変わりはないにしても、親が恋しくて、取るものもとりあえずすっとんで来たその時の気持ちと、あるいは役目柄、何となく帰って来たその時の気持ちと、果たして、親神様は、どういうふうに私たちのその心を御覧になっているだろうか、受け取っておられるだろうかということを考えたならば、私はいろいろと心に浮かんでくるのであります。

詰所というものは、母屋という建物は、そういう人が出入りする建物なのであります。時に